

ヘーゲルと歴史的現在：  
未公刊講義録と最新のテキストをふまえて

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-01-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山崎, 純 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00024392">https://doi.org/10.14945/00024392</a>

# ヘーゲルと歴史的現在

——未公刊講義録と最新のテキストをふまえて

山崎 純

一 はじめに

一世を風靡したポストモダンのはかげをひそめ、かわってドイツ観念論への関心が高まっている。とくにヘーゲルは一種のモードにすらなりつつある。難解な思弁で知られるヘーゲルが「なぜ、いま？」と思いたくなる。現代文明の危機を前にして、西欧文明を疑問視し近代的な価値をいとも簡単に投げ捨てたのが、ポストモダンだった。だが、さまざまな意匠でポストモダンが乱舞したあと、人々は〈近代〉を簡単に切って捨てることなど、思想においても行為においても不可能であることに気づいたのであるか。近代に憧れつつ近代を超えようとした男にいま熱い視線が集まっている。没後一六〇年以上を経て、ヘーゲル思想の解釈と評価は固まりつつあるどころか、今まさに戦国時代に突入しつつある。とくに彼の体系が完成されたときされる晩年の講義の筆記録が近年続々と発見されるに至り、「体系家ヘーゲル」のイメージが大きく変わりつつある。ベルリンでヘーゲルはすでに完璧な哲学体系を完成させ、その原理をさまざまな領域に応用していったという既成のヘーゲル像が音を立てて崩れ落ちていく感がある。

ヘーゲルはすでに出来上がった体系に安住するような思想家ではなかった。彼は最後まで現実と格闘し続け、みずから体系を解体・再構築し続けた。近代的な価値を問い直そうとしてヘーゲルに立ちかえろうとするなら、こうした思想的営みの現場が発掘されなければならない。とりわけ、彼自身が最晩年に〈近代〉を改めて意味づけ直そうとしたことに注目しなければならない。『歴史哲学講義』の現行版は「啓蒙と革命」によって閉じられている。フランス革命以降の四十年の現代史をあつかったこの結章部分は、じつは終焉の年（一八三一年）に初めて詳述されたことがわかっている。一八三〇年代は現代的な価値観の中核をなすリベラリズムと功利主義が台頭する時代である。この幕開けにあたって、ヘーゲルは自由についての謬見を批判しつつ、近代の原理を歴史的な必然として正当化しようとした。それは「終わるはずのない歴史を十九世紀のプロイセン国家のなかに終わらせる」ためではない。むしろ近代の「自由と主体性の原理」によって、歴史的運命についての本来的な経験を開くためである。目的論的な歴史観を超えて、決断と危機に満ちた本来の歴史がいま始まるうとしている。それが歴史的現在（Ⅱ近代）を本史の始まりとして位置づけようとするヘーゲルの最後の歴史意識であった。

このような解釈をこれまでに刊行されたガンス版（一八三七年）、カール版（一八四〇年）、ラッソン版（一九一七—三〇年）、ホフマイスター版（一九五五年。ラッソン版の部分改訂）のいずれからも導くことは困難である。これらはいずれもさまざまな学期の資料を合成して作られているからである。さらにガンス版とカール版には重大な改竄の疑いさえある。<sup>(1)</sup>カール版が出た一八四〇年はフリードリッヒ・ヴィルヘルム四世が即位した年であり、四八年革命の課題となる出版・信条・結社の自由が激しく争われる四〇年代の始まりである。息子カールは数々の粉飾を施して、父ヘーゲルを体制に安全な思想家として描こうとしているように思えてならない。いま最も普及している現行版（ズールカンパ版、岩波書店の邦訳）はこれを底本にしているのである。

「世界史の哲学」をヘーゲルはベルリン大学で一八二二／二三、二四／二五、二六／二七、二八／二九、三〇／三一  
年のいずれも冬学期に講義した。九年間の講義期間にその思想内容は大きく変化した。例えば、序論の歴史理論の講述  
のための草稿は一八三〇年に根本的に書き改められている（後述8頁）。従来の諸版はは五つの学期の筆記録とヘーゲ  
ルの自筆草稿を合成して作られているため、思想的な発展をとらえることはできない。あらゆる存在を歴史的展開の相  
においてとらえようとするヘーゲルの歴史哲学が、その歴史的な発展を無視して扱われてきたことは皮肉と言うほかな  
い。今後は現存する資料を駆使して各学期の講義の実態を可能な限り復元しながら、それを発展的な相において考察し  
なければならぬ。もはや現行版だけでヘーゲルの歴史哲学を語る時代は終わった。

以下においてヘーゲル歴史哲学をめぐる最新の研究動向と資料状況を報告しつつ、新資料をふまえて新しい解釈を試  
みたい。まず九六年九月に開催され筆者も参加した国際シンポジウムの様子を報告したい（二）。次に現存する資料の  
状況と最近刊行された二つの新版について述べる（三）。これら新資料から読み取れるヘーゲル歴史哲学の実像を、序  
論の「歴史における神の摂理」という思想（四）と、講義末尾の近代をめぐる歴史意識（五）について明らかにしたい。

## 二 『世界史の哲学』講義をめぐる国際シンポジウム（一九九六年九月）

「歴史哲学」は現在ヘーゲル研究の焦点になりつつある。今年九月二十五日から二十八日、ヘーゲル研究所のスタッ  
フを中心にボーフムのルール大学で行われたシンポジウムのテーマは「ヘーゲルの『世界史の哲学』講義」であった。  
それは以下のような内容であった。

(25日)

開会挨拶

D・ケーラー(ヘーゲル研究所員)、E・ヴァイサーローマン(ハーゲン大学助手)

開会講演 「ドイツ国制批判」におけるヘーゲルの世界史の構想

H・マイアー(元バイエルン州文部大臣、現ミュンヒェン大学教授)

(26日)

〔ベルリン大学における「世界史の哲学」講義——その体系と構想〕

(1) ヘーゲル「世界史の哲学」講義の編集問題

A・グロースマン(ヘーゲル研究所員)

(2) 精神と歴史

F・ヘスペ(ベルゲン大学ウィットゲンシュタイン研究所員)

——ヘーゲルの講義における二つの概念の発展について

(3) 一八三〇/三一年のヘーゲル「歴史哲学」講義のハイマンによる筆記録について

K・ファイヴェック(イエーナ大学講師)

〔ヘーゲル歴史哲学に関する事例研究〕

(1) 宗教改革とフリードリッヒII世

E・ヴァイサーローマン(ハーゲン大学助手)

(2) 歴史と教養形成——ヘーゲルの教育構想

ジョン・イム・クオアン(ハーゲン大学)

(27日)

〔ヘーゲル歴史哲学の継承とそれに対する初期の批判〕

(1) ガンスの相続法論

N・ヴァツェック(パリ第八大学教授)

(2) 歴史哲学の主題をめぐる競争——F・シュレーゲルとヘーゲル

O・ペゲラー(ヘーゲル研究所長)

〔現代的意義と影響史〕

(1) ハンス・フライアーによるヨーロッパ世界史の再構成

T・ギル(サントクト・ガールン大学教授)

(2) 「歴史における神」ではなく「宗教における神」

H・J・ゲッツ(ハノーヴァー大学教授)

——ローゼンツバイクのメシア的認識理論

(28日)

(3) 理性と物語——ヘーゲルに対するリクールの関係

B・リープシュ(ルール大学講師)

総合的討論と論集刊行の打合せ

このプログラムに見られるように、講義録の編集方針やごく最近発見されたハイマン筆記録の紹介などの資料面から、「世界史の哲学」講義における近代の位置づけ、ヘーゲル歴史哲学の影響またはそれへの批判、現代哲学との関係など、多角的な視点からの研究報告と討論がなされた。シンポジウムは二十名程度の少規模のものであったが、それだけに密度の濃いものであった。<sup>(2)</sup>

私はとりわけ現在の資料状況と講義録の編集状況に強い関心をもって参加した。グロースマン(A. Großmann)が、講義録の新しい編集方針について報告した。彼の報告のタイトルはHegel oder “Hegel”?——Zum Problem des philosophischen und editorischen Umgangs mit Hegels geschichtsphilosophischen Vorlesungen. (ヘーゲルそれと「ヘーゲル」——ヘーゲル歴史哲学講義に哲学的かつ編集的にかかわることのもつ問題)というものであった。このなかで彼は同一年度の幾つかの筆記録の比較検討を通じて教室でヘーゲルが語ったと思われる言葉に近づこうとすることを断念すべきだと主張した。このようなやり方は、学生の筆記録という「二次的な資料を相互に組み合わせ、一次的資料

すなわち「もともとの」あるいは「本当の」ヘーゲル (der "ursprüngliche" oder "authentische" Hegel) を割り出そうとするものであり、誤った幻想だ」と批判する。「ヘーゲルの講義の筆記録としてわれわれに伝えられているものは、けっして「もともとの」あるいは「本来の」ヘーゲルではない。筆記録から「本来の」ヘーゲルを割り出そうとする野心は誠実に放棄しなければならない」。この編集態度はイエシュケによる『宗教哲学講義』の編集方法とは異なる。むしろ、イエシュケ的な方法を明確に意識して、同一年度の幾つかの筆記録を合成することなく、筆記録そのものを編集刊行することを提案している。<sup>(3)</sup>ヘーゲルが教室で語った言葉そのものに迫ることはたしかに容易ではない。けれども、十分な資料が与えられれば、百パーセントは無理でもそれに近づくことは可能である。この努力を最初から放棄しているのかという疑問を私は抱いた。

グロースマンに限らず、これが全体の雰囲気だった。例えば、イエーナ大学のフィーヴェック (彼はいま二年前にブタペストで再発見されたハイネマンの筆記録を解説中である) は、「最終学期の筆記録はハイネマンのものを含めて四つあるが、どれがヘーゲルの講義を最も正確に伝えているのか」との私の質問に対して、「正確」というのはない。筆記録にはいつもすでに解釈が入り込んでいる。だって解釈学的にはそうだろう」と答えた。たしかに、学生は自分の理解できた範囲で記録したのであろう。またヘーゲルの言葉通りではなく、自分の表現で筆記することもあった。そこにすでに解釈が入り込んでいるというのも解釈学的には正しい。しかしなかにはヘーゲルの言葉を限りなく忠実に書き取るうとした速記録もあったし、それを文章的に整えた清書稿もあった。今日ならばテープレコーダーという文明の利器を用いて講演や対談内容の百パーセントの復元が可能である。当時は速記という手段しかなかったとしても、実態に近い形の復元は資料状況さえ許せば可能なはずだ。ドイツの研究者にはまずその作業をやって信頼に値するテキストを提供してほしい、というのがわれわれアジアの研究者の切なる希望である。まず、ヘーゲルの講義のほぼ実態に近いと思わ

れるものがあり、それを弟子たちがどう受けとめ、どう『講義』を編集し、それを世間がどう受けとめたかが分かって、初めて解釈の歴史としての影響作用史も研究可能となる。もしもフィーヴェックが言うように、ヘーゲル自身の思想と弟子の受けとめ方を意識的に曖昧にするとしたら、われわれは一体なにを議論しているのか分からなくなるのではなからうか。

### 三 「世界史の哲学」講義の資料状況と新しいテキスト

グロースマンらの編集態度には疑問を感じる。これに対しては今後批判も予想され、彼らが考えるように編集がなされるという保障は何もない。現にペゲラー所長に質問したみたところ、「世界史の哲学」講義の編集方針についてはまだ何も決まっていない。いろいろな対案がありうる。どのような編集がよいか互いに競争すべきである、といった鷹揚な答えであった。このような状況であるため、講義について信頼に値するテキストをわれわれが手にできるようになるには、なお紆余曲折が予想される。おそらくすべての年度のテキストが刊行されるのはかなり先と思われる。そこで筆記録の原資料にあたる必要が出てくる。

「世界史の哲学」講義に関する現存する資料を整理すると、9頁の表のようになる。このうちヘーゲル自筆の講義草稿を初めて独立して編集したものが一九九五年に刊行された。イェシュケによって編集され、全集第18巻に収録されている。序論のための「二二二〜二八年草稿」と「三〇年草稿」、他に三つの断片が含まれている。そのなかでも三〇年草稿には重い意味がある。この学期の講義予告では「世界史の哲学」全体ではなく、その「第一部」（序論）のみを講じることになっていたからである（Br. 4/1.118, 124）。息子カールは「後の講義になるに従って、哲学的な総論が次第に



減って、歴史的な素材が多くなり、全体がポピュラーになってくる」(K.HT上二六)と述べているが、実は逆だった。ヘーゲルはこの学期に歴史を哲学的にどうとらえるべきかを根本から考えようと決意して、二二〜二八年草稿とはまったく別に新しい草稿を書き始めた。それがこの草稿である。これには、歴史についての哲学的総論をヘーゲルが最後に自らの手で書き記したものと重みがある。

ところが、予告に反して講義は結果的に以前の学期と同様に全体を扱った。なぜ結局全体を講じることになったのか。歴史理論の詳述だけで学期の全体を費やすだけの準備をしきれなかったため、というのがイエシュケがあげている理由である(GW. 18.384)。なにしろ、この頃ヘーゲルはとても忙しかった。開講直前の十月まで大学の総長職にあつた。『論理学』と『精神現象学』の改訂、「神の存在証明について」の講義の刊行など、出版計画も多数抱えていた。私にもう一つ、この年七月に勃発した七月革命とその後の影響から、とりわけ近代の自由の展開の把握に力を入れる必要を感じたためという理由をあげたい。おそらくこの二つが主な理由であつたであろう。

聴講生による筆記録は現在までに一八が伝えられ、あるいは再発見されている(これらの筆記録のそれぞれの性格についての詳述は紙数の都合で別稿に譲りたい)。これ以外に旧版で用いられたとされるシュルツェ、ヴェルダーのもの、さらにホトリーの別の年度のものは発見されていない。このうち初年度の筆記録が今年ようやく公刊されただけである。このような状況からしてすべての学期にわたって発展史を通覧することはできない。しかしながら歴史哲学はヘーゲル哲学のなかでも最も関心が集中するところでもあり、ヘーゲル自身の講義を歪めていとされる現行版によってさまざまな誤解が流布している状況を鑑みて、現在利用可能な資料の範囲でこの歪みを少しでも取り除きたいと思う。そこで、まず、全集版の自筆草稿と現行版とを比較検討し、ガンズとカールの書き換えによってヘーゲルの思想がどう歪められているかを示したい(四)。次に、刊行されたばかりの初年度講義のテキストとアーカスダイクによって筆記され

「世界史の哲学」講義に関する資料と公刊されたテキストの一覧

現存資料	所在地	公刊されたテキスト
<b>1822/23年冬</b> ヘーゲルの自筆草稿(序論のみ現存) 東洋の歴史についての断片 ホトー グリースハイム ケーラー ハーゲンバッハ	ベルリン州立図書館蔵 シラー博物館蔵  ソルボンヌ図書館蔵 ベルリン州立図書館蔵 ベルリン州立図書館蔵 バーゼル大学図書館蔵	{ラッソン版 1917年 ホフマイスター版 1955年(3-22) イェシュケ版 1995年(GW. 18. 121-137) (GW. 18. 221-227)  } Vorlesungen. Bd. 12. 1996年
<b>1824/25年冬</b> ケーラー コレヴァン ドーヴ		
<b>1826/27年冬</b> エールトマン フーベ ヴァルター 筆記者不明 シュティーフ ガルチンスキー	ベルリン州立図書館蔵 ベルリン州立図書館蔵	ホフマイスター版(258-271)
<b>1828/29年冬</b> ヘーゲルの自筆草稿(序論のみ現存) 筆記録は未発見	ベルリン州立図書館蔵 シラー博物館蔵	{ラッソン版 1917年 ホフマイスター版 1955年(3-22) イェシュケ版 1995年(GW. 18. 121-137)
<b>1830/31年冬</b> ヘーゲルの自筆草稿(序論のみ現存) 「世界史の哲学」の断片 「世界史の歩み」についての断片 カール・ヘーゲル アーカスダイク ヴィーヘルン ハイマン 筆記者不明 ベーク (ローマ史で中断)	ベルリン州立図書館蔵   ヘーゲル・アルヒーフ ユトレヒト大学図書館  ブタペスト図書館蔵  ベルリン州立図書館蔵	{ラッソン版 1917年 ホフマイスター版 1955年(23-176) イェシュケ版 1995年(GW. 18. 138-207) (GW. 18. 208-210)  (GW. 18. 211-214)

(所在地はわかっているものについてのみ記した)

た最終学期の講義（オランダのユトレヒト大学図書館よりマイクロフィルムを入手）とを比較して、ヘーゲルの近代認識の深まりと歴史思想の最終的な到達点を明らかにしてみたい（五）。

#### 四 「神の摂理」をめぐって——歴史神学から歴史哲学へ

ガンスもカールもヘーゲルの自筆草稿を尊重して編集したと言っている（G. 13f. 上二〜三K. 18. 上二七）。たしかに、草稿の字句がそのまま再現されているところも多い。ところが草稿の一節を採用しながら、途中で別の記述に置き換えられているところもある。これらの書換えのなかには、微妙な修正でありながら、根本的な意味のずらしを引き起こしていると思われる箇所がある。二つの事例に即して検討してみる。テーマは「歴史における摂理」というヘーゲル歴史哲学の根本にかかわるものである。

##### 改竄その1

ヘーゲルの草稿は「理性が世界を統<sup>ず</sup>べているという思想」を最初に言ったのはアナクサゴラスであるという思想史的な事実<sup>す</sup>に言及して、こう書いている。

「ソクラテスがアナクサゴラスの原理に見出した不十分さは原理そのものにかかわるのではなく、この原理を具体的な自然に適用する際の欠陥にかかわる。つまり、自然がこの原理から理解され、概念的にとらえられるのではなく、一般にこの原理が抽象的なままに固持されるというところにある。もっとはっきり言えば、自然がこの原理に基づく一つの発展としてとらえられない。この原理によって、すなわち動因としての理性によってもたらされた有機組織としてとらえられないのである。〔……〕私はまず理性が世界を統べているという思想の〔アナクサゴラス

における」最初の出現だけでなく、その欠陥 (das Mangelhafte) についても詳しく述べたが、それは、この思想がそれとは別の形態に完全に应用されているからだ。その形態はわれわれには周知の宗教的真理の形態であって、世界が偶然にさらされ外的・偶然的な原因に委ねられているのではなく、摂理が世界を支配しているという確信がある」(GW. 18.145f)。

アナクサゴラスのヌース論はまだ抽象的で、欠陥をもっている。これが欠陥をもったまま、「摂理が世界を支配している」という宗教的な形式に应用されている。歴史の把握はいつまでもこのような抽象的な欠陥ある形にとどまっていたはならない、とヘーゲルは言いたい。

これに基づき教室での講義をアーカスダイクはこう筆記している。

「しかしながらアナクサゴラスはこの原理を欠陥ある仕方で (mangelhaft) 適用し、自然の元素等々にのみ結びつけた。彼は自然を理性によって組織づけられたものとしてはとらえなかった (つまり、抽象的にしかとらえなかった)。この原理はとりわけ、摂理が存在するという宗教的真理との関わりで、信仰箇条としての摂理信仰に適用される」(Ac. 4-5 草稿後半部に対応する記録はない)。

この箇所をガンス版とカール版は筆記録からではなくヘーゲルの自筆草稿から採用しながら、「……」以降の後半で次のように重大な書き換えを行っている。

「理性が世界を統べているという思想のこうした出現は、われわれには周知のさらに進んだ応用と連関している。すなわち、世界が偶然にさらされ外的・偶然的な原因に委ねられているのではなく、摂理が世界を支配しているという宗教的真理の形態をとる」(G16=Sk. 25f-IIIc)。

ヌースが世界を支配しているというギリシャ思想のさらに進んだ形が摂理への信仰というキリスト教の宗教的真理の

形式である、というのである。ガンズは草稿にある「欠陥」という語を意図的に削除して、「欠陥ある」ヌース論から撰理信仰への展開を肯定的に描いて、もとの意味を逆転している。それをカールはそのまま第二版に引き継いでいる。<sup>(4)</sup>  
改竄その2

「世界史は創造的な理性の豊かな産物であるが、これをも概念的に把握する時がついにはやって来るに違いない。その豊かな産物を認識する機が熟しているかどうかは、世界の究極目的であるものがついに普遍的で意識的な仕方  
で現実のなかへと歩み行ってきたかどうかにかかっている。これがわれわれの時代の了解だ」(GW. 18.149-150)。  
現実すなわち国家における宗教の理念の実現を基礎にして世界史の理性的な把握が可能となる時代がやって来る。自由の実現という歴史的な成果を収穫できる時、世界史の究極目的を概念把握できる、と草稿は言いたい。  
ところがカール版ではこうなっている。

「世界史は創造的な理性の豊かな産物であるが、これをも概念的に把握する時がついにはやって来るに違いない。  
〔以下は草稿にもガンズ版にもない〕動物とか植物とか個々の運命のなかに神の智慧がはたらいているのを見て感嘆するということが一時流行した。そのような対象や素材のなかに撰理が啓示(開示)されるといふことが認められるならば、世界史においても撰理が啓示されるといふことがどうしてないと言えようか? 世界史という素材はあまりにも大き過ぎるように思われる。けれども、神の智慧、すなわち理性は大きい素材においても小さい素材の場合と同一である。したがって、神の智慧は大きなものには適用できないと考えて、神を微力なものに貶めてはならない。〔以下は草稿と同じ〕われわれの認識は永遠の知恵によって目指されているものが自然の基盤においても、世界のなかに現実に活動している精神の基盤において現れているという洞察を獲得することを目指している。そのかぎりにおいて、われわれの考察は神義論、すなわち、ライプニッツが形而上学的に、彼なりのやり方でまだ抽象

的で無規定的なカテゴリーを用いて試みた神の弁明（正当化）である」（Stk. 28上三九）。

傍線部はガンス版にもない。カールの創作ではないかと疑いたくなる。この部分は、個々人の運命のなかに神の深い思し召しを悟るといふ敬虔な信仰者の心の動きと、世界史の長いタイムスパンで見た時の基本的趨勢（これを「歴史の目的」と呼ぶ）とを同じレヴェルでとらえるよう要求している。この一節を加えることで、ヘーゲルが神の摂理を信じきっているという印象が与えられる。ヘーゲルは「歴史における神の摂理」という宗教的な表現は抽象的なイメージのレヴェルにとどまっていた不十分である、と考えていた。むしろ宗教的なイメージを超えて、理性的なものが一般的現実すなわち国家において歴史的に実現すべきと考える。歴史神学から歴史哲学へと脱構築するという企図が自筆草稿からは鮮明に読み取れる。これをカール版は意図的にぼかそうとしている。

カールは編者序文で、旧版の改訂に際しては「新しい挿入をヘーゲルの草稿から言葉通りに採用し」「著者自身の言葉で語らせるようにした」（K. 19. 上二七）と述べているが、上記の例からして、この言葉は信用できない。ヘーゲルの歴史哲学のその後の運命は、まさにガンスやカールの狙い通りになったように思われる。K・レーヴィットの解釈にその例を見てみよう。レーヴィットはカール版の表現に惑わされながらも、まずは正しい直観も述べていた。

「ヘーゲルをアウグスティヌスから原則的に分けているもの、それはヘーゲルがキリスト教を思弁的に解釈して、摂理を「理性の巧智」に翻訳していることである。……キリスト教信仰のこうした世俗世界化、……あるいは精神のこうした実現によって、ヘーゲルはキリスト教の精神に忠実であり続け、地上における神の国を説明していると思っていた。最後の成就というキリスト教的な待望をヘーゲルは歴史のプロセスそのもののなかへと移したのだから、彼は世界史を自己正当化的なものともみなした。「世界史は世界法廷である」。この命題は、世界がすべての歴史の最後において審判に直面するということの意味するのであるから、その根本的な動機において宗教的である。同

時にそれは、審判は歴史の過程そのものとして遂行されることを意味するのであるから、その世俗的な言い換えにおいて非宗教的でもある」。

ここまでは歴史神学の世俗化というヘーゲル歴史哲学の「宗教的」にして「非宗教的」な、両義的な意図を良く読み取っている。ところがレーヴィトはこう続ける。

「ヘーゲルは神学を哲学へと置きかえ、神の国を世俗世界史的に実現するという自身の大いなる試みに潜んでいる両義性を自覚していなかった。自由の理念の実現が歴史の究極目的であるが、この理念を神の意思と同一視することの困難を何も感じていなかった。というのも、彼は「絶対者の司祭」として「神によって哲学者たるよう呪われた」者として、神の意思とその計画を知っていると信じていた。彼は精神の道を歴史の経過と結果を規準にして全体的に洞察し正当化する逆立ちした予言者を自認していた」<sup>(5)</sup>。

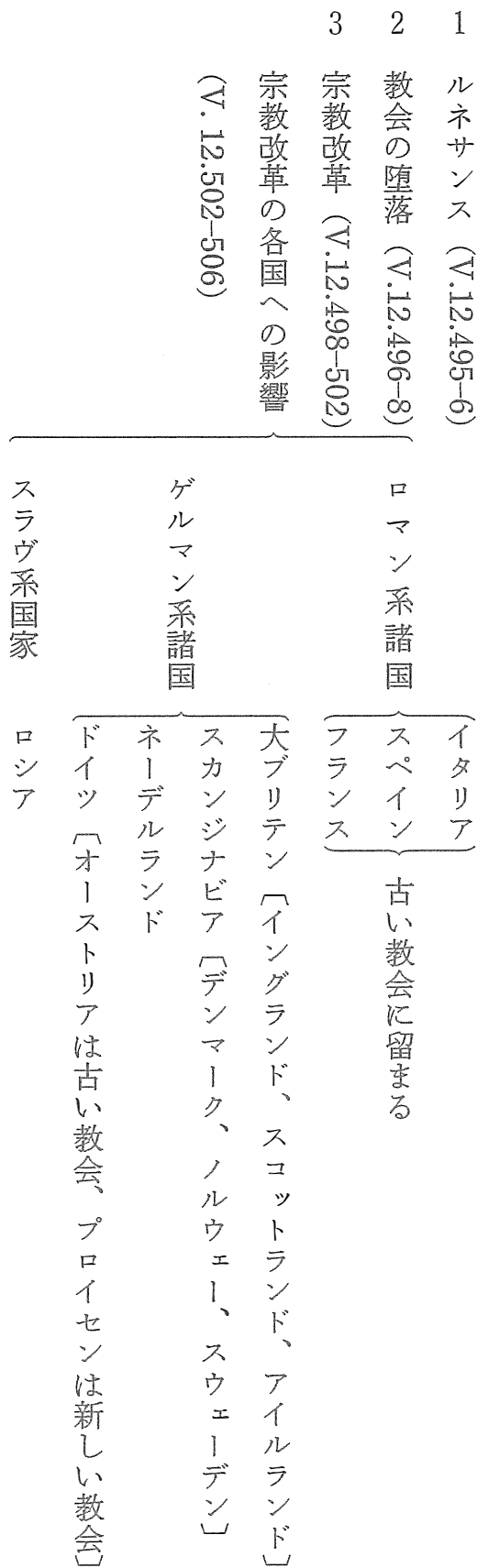
これはヘーゲルに対する巷間に流布した偏見を繰り返しているだけである。レーヴィトの理解とは逆に、ヘーゲルは「神の摂理」の世俗化を自覚的に遂行し、ヨーロッパ・キリスト教の伝統的な神学的歴史観念を哲学的歴史観念へと切り換えようとした。それが自筆草稿からははっきりと見て取れる。レーヴィトはこの意図をとらえそこなっている。この点でガンスやカールの改竄によるカモフラージュは成功したと言える。だが、それによって歪んだヘーゲル像も定着してしまった。

そもそもヘーゲル歴史哲学のこれまでの解釈には或る両義性があった。(α) 一方では、神の計画を知り尽くしていると傲慢にうそぶく神がかったお話とする見方がある。このような見方があること自体、ガンスとカールの改竄の効果を証明するものだ。(β) 他方には、歴史の終極を最後の審判にではなく、今に置き、現在を讚美理想化して、その後の発展の可能性を否定したとする見方がある。この二つとも間違った見方である。(α)の見方に対しては、「神の摂理」

という宗教的なとらえ方をヘーゲルは確信犯的に世俗化し、歴史の目的や意味を歴史に内在化しようとしていた、と反駁できよう。「理性は歴史的な事柄に内在し、この歴史的な事柄のなかで、しかもその事柄によって自らを成就する」とアーカスダイクの筆記録にもある (Ac. 20)。(β) はヘーゲルが常に現在に焦点を据えている点をとらえた部分的には正しい解釈である。しかし、歴史の進歩がああ時点で止まった(終わった)という把握は間違っている。それを次に近代についての叙述のなかに見てみよう。

## 五 自由の原理の「すでに」と「まだ」

二二／二三年の講義では中世末期以降の叙述は次のようになっていた。





## 近代

- 1 宗教戦争(新しい教会が世俗的にも承認される) (V. 12.506-511)
- 2 自然科学の成立 (V. 12.512-516)
- 3 啓蒙主義と、その自由意思の原理の実現 (V. 12.516-521)

このように宗教改革以後の歴史が、ヨーロッパ諸国家の確立と国権の強化、および経験科学の成立と啓蒙主義の展開という二面からとらえられている。近代の最後すなわちこの学期の最終講義は、宗教改革と革命の関係をテーマとして、次のような叙述で閉じられている。

「意思の自由 (Freiheit des Willens)」という近代の理念は「福音主義教会の原理 (das Prinzip der evangelischen Kirche) から直接生じた」ものであった。「もろもろの革命はこの思想から始まった。この思想が現実と関わり、特定の秩序に対して暴力をふるい、既成のものに対する暴力となる。この暴力が革命一般である」。「フランス、イタリア、ナポリ、ピエモンテ、スペインなどのロマン系諸国では」、王座の転覆が「宗教の変革を伴わない単なる政治革命 (nur politische Revolutionen ohne Änderung der Religion)」であった。「宗教の変革なしには真に政治的な変革すなわち革命は実現できない」。これらの諸国において国制の原理とされた自由の原理は抽象的なものにとどまった。これに対して、「福音主義の立場にたつプロテスタントの諸国家、例えばデンマーク、イギリス、ネーデルランド、プロイセンでは事情がまったく異なっていた」。これらの国家は「宗教改革によってすでに革命をなし遂げ、革命は済んでいた」。「国家のなかで通用すべきことが洞察や普遍的な国家目的から出発して、それによって正当化されなければならないという本質的な原理が現存していたからである」。そのため、なされるべきことが普遍的な教養形成を通じて平和裡になされた (V. 12.519-521)。

このように宗教改革以後、改革を受容したゲルマン系と、改革を拒否したロマン系とで、国家の運命が分かれたことを語っている。後者においては暴力革命が引き起こされ、前者においては改革の精神は上からの近代化として展開した。この文脈で、ヘーゲルは最後の「世界史的な人物」としてフリードリッヒ大王の名を挙げている。「彼は国家の普遍的な思想をとらえ、その普遍的な目的を堅持したがゆえに、 $\langle$ 哲人王 $\rangle$ と呼ばれた」(V. 12.517)。大王は国家を宗教によって左右するのではなく、国家独自の普遍的な目的によって導いた英雄だった。彼とともに宗教戦争の時代は「国制をめぐる戦争 (die konstitutionelle Kriege) の時代へと移行した (V. 12.518)。

これに対して、最終学期における近代の叙述の構成は次のようになっている。  
ゲルマン世界の第三期

### 宗教改革

#### 宗教改革以後の展開

#### 近代

- (1) 近代の原理 II 自由意思の原理
- (2) フランス革命の経過とその世界史的意義
- (3) ゲルマン系諸国の事情 [オーストリア、ドイツ、イギリス]

近代への序幕は宗教改革から始まる。これが啓蒙主義へと発展し、革命を引き起こす。この点までは初年度と同じである。宗教改革と啓蒙主義とが同じ理念の展開として、より一体的に論じられている点にこの学期の特徴がある。ルター、デカルト、ルソー、カントがともに自由の原理を掲げたものとして一連の流れのなかで扱われている。宗教改革に始まる新しい精神的な原理はフランスにおいて啓蒙主義として花開く。「この啓蒙主義がフランスからドイツへと入って来て、そこからまったく新しい観念世界が造られた」(Ac. 474. Vgl. Sk. 523)。この表現は、ヘーゲルが啓蒙を通過した新プロテスタンティズムの立場に立つことを一層鮮明にしている。<sup>(6)</sup>

さらに、この学期の最大の特徴は、とりわけフランス革命の叙述を充実させた点にある。その動機はおそらく、七月革命の勃発とともにヨーロッパが再び動乱の時代を迎えたことへの危機感にあった。このなかで「主観的意思の軌轢・葛藤」が革命の混乱の原因であるとして、「リベラリズム (Liberalismus) とアトミズム (Atomistik)」(Ac. 489) を批判しているからである。これに対して、革命という道をとらずに宗教改革の精神をうまく実現し具体化してきたプロイセンが肯定的に描かれているのは確かである。けれども、「これが最高である」とか、「これで歴史が終わる」などと位置づけられているわけではない。「最後」に位置づけられているのは、「自由の原理」そのものである。「思考における自由」というこの原理とともに、われわれは世界史の最後の段階に移行し、われわれの時代の精神の形式へと移行する」(Ac. 475) と述べられている。<sup>(7)</sup> ここでいう「世界史の最後の段階」とは「われわれの時代」＝現在のことである。終末論の言う宇宙の終わりでも、歴史の発展がとまることでもない。ヘーゲルにおいても歴史は開いている。

「自由の原理」はロマン系の諸国では「リベラリズムとアトミズム」として展開したが、その結果は革命であり、しかも相次いで「破綻した」(Ac. 489)。自由の原理は掲げられたが、この原理を具体的な体制として実現することにヨーロッパはまだ達していない。自由が具体的に実現されないうちは、主観的意思はいつでも自分を絶対化し、ただ既存の秩序を壊そうとする。これは極めて危機的な状況である。「歴史はこの面から見て、解決されなければならないこうした難問、こうした不協和をもって終わる」(Ac. 489. Vgl. Sk. 535f. 三二一八)。これがヘーゲルの最後の時代認識であった。

歴史の最後はいつでも今である。「歴史は……終わる (Die Geschichte endigt)」という表現は「今」の位置を見定めるところから来ている。歴史は今で終わる。しかし「今」を生きる者には、「今」はいつでも新しい歴史の始まりでもある。「ヘーゲルは終わるはずのない歴史をプロイセン国家のなかに、あるいは自身の哲学体系のなかに終わらせた」

というのは甚だしい誤解である。このような解釈はヘーゲルの最後の思想的な境地から最も遠いものである。むしろ、キリスト教的な目的論的な救済史を越えて、自由意思にもとづく決断と危機・岐路に満ちた本来の歴史がいま始まったという意識である。「自由意思」というこの新しい時代の原理を歴史的必然として概念的にとらえること。これが「世界史の哲学」の課題であった。将来に課題を残したまま歴史哲学は終わる。「ミネルバの梟<sup>やぐらう</sup>」としての哲学は、その眼をたそがれゆく過去へと向け、本質的に考察的である。終焉の年にヘーゲルは「過去の最後」である〈現在〉にまで歴史的な考察を伸ばした。それはヘーゲルにとって、「世界史が経験した最も実り豊かで、最も教訓に富んだ」(Sk. 4. 507) 四十年であった。ここから、自由の原理は「すでに」打ち立てられたが、これを理論的に彫琢しつつ一般的現実のなかへと具体化していく課題に今日われわれは直面しているという結論を導き出した。これがヘーゲルにとって、「歴史の終わり」にして「歴史の始まり」であった。

(引用略号) 引用は次の略号で指示する。邦訳の頁数は漢用数字で示す。ただし、訳文は行論との関係で一部変更せざるをえなかった。「」内は引用者による追補である。傍点による強調も引用者によるものである。

- Ac. (ノーススタークの筆記録) G. W. F. Hegel, Dichtat über Philosophie der Geschichte. von J. Ackersdijck.  
Br. (書簡集) *Briefe von und an Hegel*. Hrsg. von Hoffmeister. Hamburg 1969-1981.  
G. (ガンス版) G. W. F. Hegel; *Vorlesungen über die Philosophie der Weltgeschichte*. Hrsg. von E. Gans. Berlin 1837.  
GW. (全集版) G. W. F. Hegel, *Gesammelte Werke*. Hamburg.  
K. (カール版) G. W. F. Hegel; *Vorlesungen über die Philosophie der Weltgeschichte*. Hrsg. von E. Gans u. K. Hegel.

2. Auflage. Berlin 1840 (Nachdruck Stuttgart 1928).

Sk. (ズールカンプ版) G. W. F. Hegel Werke in 20 Bänden Hrsg. von E. Moldenhauer u. K. M. Michel. Bd. 12. 20

Frankfurt a. M. 1970. (非カール版) 武市健人訳『改訳 歴史哲学』上、下巻、岩波書店 一九六八〜九年。

V.12. (講義録シリーズ) G. W. F. Hegel, *Vorlesungen über die Philosophie der Weltgeschichte*. Hrsg. von K. H. Ilting, K. Brehmer, u. H. N. Seelmann. Hamburg 1996.

(注)

(1) 詳しくは F. Hesse, *Hegels Vorlesungen zur "Philosophie der Weltgeschichte"*, in *Hegel-Studien*. Bd. 26. 1991. S. 85f. 山崎純「ヘーゲルの原像をもとめて——後期発展史研究の幕開け」『創文』一九九五年三月、「講義録新資料にもとづくヘーゲル像の刷新——後期発展史研究の前進のために」『ヘーゲル哲学研究』第2号、一九九六年七月参照。

(2) このシンポジウムには日本から、筆者のほか、幸津國生、高田純、日暮雅夫、寄川条路の各氏が参加し、五分の一を日本人研究者が占めた。シンポジウム開催の情報を教えて下さった幸津國生氏と寄川条路氏に、この場をかりて感謝申しあげたい。

(3) この方針はすでにヘスペが提案していた(前掲論文 S. 86)。

(4) ヘスペはカールの改竄のみを指摘しているが、改竄はガンス版からすでに始まっている。ヘスペの前掲論文にはガンス版の検討がほとんど欠けている。

(5) Karl Löwith, *Sämtliche Schriften*. Bd. 1. *Weltgeschichte und Heilsgesch.* Stuttgart 1983. S. 67f. 信太正三訳『世界史と救済史』創文社 一九六四年、七六頁。

(6) ヘスペは、最終学期には歴史の「最後の精神的な原理はもはやプロテスタントイズムではなく、フランスとデカルトに端を発する啓蒙主義である」。「この発展によって世界史の進歩はドイツからフランスへと移行する」と述べている(F. Hesse, "Die Geschichte ist der Fortschritt im Bewusstsein der Freiheit". *Zur Entwicklung von Hegels Philosophie der Geschichte*. in *Hegel-*

*Studien*. Bd. 26. 1991. S. 185, 187)。しかし、ヘーゲルが最後にプロテスタンティズムからフランス的啓蒙主義に乗り換えたと思わせる表現は誤解を招く。啓蒙主義を通過した新プロテスタンティズムの立場を鮮明にしたと言うべきである。ヘスペ論文には多くの誤りがあるが、詳しい批判は別稿に譲る。

(7) この箇所はガンス版 (G. 437) では「この自由の原理とともに」となっているのに、カール版 (SK. 524) では、「この形式的に、絶対的な原理とともに」とされ、否定的なニュアンスが与えられている。

(追記) ヘーゲル研究は現在とりわけ後期思想研究を中心に大きく揺れ動いている。新資料の発見や新版の刊行などがあり、昨年の大会での情報が今年はずでに古くなっている。大会での報告を論文にまとめるにあたって、新しい情報にもとづいて大幅に書き改めた。昨年のシンポジウムの忠実な報告とならなかったことをお許し願いたい。

(静岡大学教授 やまざき じゅん)